

Economic Indicators

発表日:2023年11月9日(木)

2023年7-9月期GDP予測(最終版)

～前期比年率▲0.5%と小幅マイナス成長を予想。内需の伸び悩みが懸念材料～

第一生命経済研究所

シニアエグゼクティブエコノミスト 新家 義貴 (Tel:050-5474-7490)

11月15日に公表される2023年7-9月期の実質GDP成長率を前期比年率▲0.5%（前期比▲0.1%）と予測する。10月31日の段階では前期比年率+0.1%（前期比+0.0%）と予想していたが、その後公表された経済指標の結果を反映し、予測値を下方修正する。

本日公表された23年9月分の国際収支統計の結果を反映し、23年7-9月期の実質輸出の予測値を前期比+0.4%（従来予測値：同+1.0%）へと下方修正、実質輸入の予測値を前期比+1.2%（従来予測値：同+1.0%）へと小幅上方修正する。筆者の想定と比べて、輸出は財、サービスとも下振れたことで下方修正、輸入は財が下振れた一方でサービスが上振れたことで小幅上方修正となっている。輸出入ともプラスが予想されるが、輸入の伸びが輸出を上回ることから、外需寄与度は前期比年率▲0.6%Pt（従来予測値：▲0.0%Pt）と、成長率の押し下げ要因になる見込みである。

また、本日公表された9月分の家計調査と家計消費状況調査の結果も反映したが、個人消費の予測値は前期比+0.3%で従来予測値から変更はない。これらを踏まえ、23年7-9月期の実質GDP成長率を前期比年率▲0.5%と予測する。

7-9月期は小幅マイナス成長が予想されるものの、4-6月期の高成長の後であることを考えると許容範囲内。景気は引き続き回復傾向にあるとみて良いだろう。ただし、やはり気になるのは内需の伸び悩み。内需寄与度は4-6月期に前期比▲0.6%Ptと落ち込んだ後にもかかわらず、7-9月期も前期比横ばいにとどまったと予想される。コロナ禍からの経済活動正常化の動きが加速することから内需主導の景気回復が実現するとの期待があっただけに、足元における内需のもたつきは懸念される。個人消費は7-9月期に増加が見込まれるものの、4-6月期の落ち込みからの反動の域を出ないことに加え、設備投資も前期に続いて冴えない。賃金は増加している一方で物価がそれ以上に上昇し、家計の購買力を削いでいることに加え、コロナ禍からのリバウンドの動きも一巡しつつあることで、内需の回復ペースは緩やかなものにとどまっているとみられる。

先行き、海外経済の減速が見込まれるため、輸出が景気の牽引役になることは期待薄だろう。こうしたなか、内需も伸び悩みが続くということになれ

2023年7-9月期GDP予測

(%)

実質GDP (前期比年率)	▲ 0.1 ▲ 0.5
内需寄与度 (うち民需)	0.0 0.1
(うち公需)	▲ 0.0
外需寄与度	▲ 0.2
民間最終消費支出	0.3
民間住宅	2.0
民間企業設備	▲ 0.1
民間在庫変動(寄与度)	▲ 0.1
政府最終消費支出	0.1
公的固定資本形成	▲ 1.2
財貨・サービスの輸出	0.4
財貨・サービスの輸入	1.2

※断りの無い場合、前期比(%)

(出所)内閣府「国民経済計算」、第一生命経済研究所



ば、景気は牽引役不在の状態に置かれることになる。今後も景気の回復傾向は持続するとみているが、回復ペースに関しては緩やかなものにとどまる可能性が高いと予想している。

(需要項目ごとの解説は、「2023年7-9月期GDP予測（1次速報）」（10月31日発行）をご参照ください）

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

